

クレジット:

UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2020 安藤 宏

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



小林秀雄 「現代文学の不安」 (「改造」一九三二・六)

〈(映画について) 昔の人はちつとして風景を眺めて夢みてゐた。眼前にある依然たる幾山河に飽き飽きして心中の風景を勝手に改変してゐた。今日ではその改変された風景が眼前にある。私達も昔の人々の様にちつと坐つて風景を眺めてゐる、奇妙な事には恐らく昔の人よりもちつと坐つてはゐるが、坐つた椅子が一秒間に百米の割合で走つてゐる。〉
〈夢を織るに必要な数々の荒唐無稽な影像是、自ら織り出す手間をかけずとも今日の科学が日々に私達の周囲に築いてくれる。お蔭で私達は既に自分の力で夢を創造する幸福も勇氣も忍耐も失つて了つた。〉〈不安が来た。不安は現代精神最大の劇である。〉〈昔は不安とは精神の或る疾病であつたが、今日では不安こそ健康な状態となつた。かういふ時、人は自分を忘れて最も饒舌になる。不安だ不安だと喋りちらすが、彼の声は少しも慄へてはゐないのである。自己宣伝の一番栄えるのは、人が己れを失つた時に限る。〉〈何故に自分を疑ふ事から始めないのか。〉〈今日の知的作家が、己れを告白しようとして思ひ止まり、(略) 己れを告白してみてもいづれは流行遅れな性格破産者を表現するに過ぎぬ、と感ずる漠然たる不安、無意味な逡巡を、私は見る様に思ふ。〉

(『小林秀雄全集 第二巻』(新潮社、二〇〇一年)二二三、二一六、二一八頁)

小林秀雄 「「紋章」と「風雨強かるべし」とを読む」 (「改造」一九三四・一〇)

〈シエストフが「悲劇の哲学」を書いた時、ロシアの社会は絶望と不安とに苦しんでゐた。さういふ社会的条件が彼の思想を生んだには相違ないのであるが、又彼が進んでかういふ社会的条件の犠牲となつたればこそ、彼の思想が人間化した表現となつて現れたのだ。思想といふものの発生にはいつもかういふ二重の意味があるのであつて、例へば現代の小説に現代社会の不安が反映してゐるといふ事実と、或る現代小説が現代の不安を表現してゐるといふ事実とは自ら別事なのだ。〉〈彼(シエストフ)の教養には専門化を知らぬ野生がある。彼は悲劇主義者でもなければ、不安の宣伝家でもない。ただ当時の社会不安のなかに大胆に身を横たへた一人の男なのだ。〉

(『小林秀雄全集 第三巻』(新潮社、二〇〇一年)二〇七、二〇八頁)

参考

三木清 「不安の思想とその超克」 (一九三八・六「改造」)

レオ・シエストフ (Lev Isaakovich Shestov, 一八六六〜一九三八)

『虚無よりの創造』河上徹太郎訳(芝書店、一九三四年)

『悲劇の哲学』河上徹太郎、阿部六郎訳(芝書店、一九三四年)

『写本の文化史 ヨーロッパ中世の文学とメディア』クラウディア・プリンカー・フオン・デア・ハイデ著、一條麻美子訳(白水社、二〇一七年)